ワンポイント・ブックレビュー

エリカ・フランツ著（上谷直克・今井宏平・中井遼訳）
『権威主義：独裁政治の歴史と変貌』白水社（2021年）

本書によれば、政府が自由かつ公正な選挙で選ばれていない権威主義体制の国家が世界の３分の１を占め、さらに近年では民主主義体制から権威主義体制への移行が増えている、という。本書では権威主義についての基本的な知識や、その発生と崩壊などの説明が行われている。

簡単に本書の内容を紹介したい。権威主義体制の政治には３つの重要なアクターが存在することが示されている。すなわちリーダー、リーダーが権力を維持すべく頼るエリート、そして大衆である。リーダーやエリートは大衆からの支持を考慮しながら、権力や影響力を追求するために競い合うことになる。これらのアクターの相互作用のもと、権威主義体制は権力を獲得していく。権力の獲得方法についても紹介されており、第二次大戦後では「クーデター」が一般的で、それ以外では、民主的な選挙を通じて権力を得た後に支配権を強化する「権威主義化」、「反乱」、「大国による押しつけ」などがあげられている。

権威主義体制が形成されると、権力の維持という課題に直面する。この課題に権威主義体制が対処する手段として「抑圧」と「抱き込み」が紹介されている。「抱き込み」とは潜在的な挑戦者に対し、その忠誠と引き換えに利益供与をする行為である。今日の権威主義体制では、権力を維持するために暴力等の旧来の手法ではなく民主的に見える巧妙な戦略を活用することも示されている。

権威主義体制はときに崩壊することがある。崩壊の要因は「クーデター」が最も一般的であり、全権威主義体制の崩壊の３分の１を占めるという。権威主義体制の崩壊後に概ね生じる３つの帰結についても紹介されている。すなわち「新しい権威主義体制」、「民主主義」、「破綻国家」である。1946年から2014年までに生じた全権威主義体制の崩壊における３つの帰結の割合は、「新しい権威主義体制」と「民主主義」は約半分、「破綻国家」はごくわずかであるという。

また本書では「権威主義リーダー」といった個人にも焦点が当てられている。リーダーが権力から離脱した後の処罰を憂慮した場合、紛争などのリスクの高い行動をとる確率が高まるといった研究結果が紹介されている。

本書を読むことで、権威主義についての知識を得られるだけでなく、世界情勢や政治についての理解を深めることができる。その一方で、個人的に今後のさらなる研究を期待したい点もある。それは権威主義や民主主義といった政治体制の形成と経済状況との関連の分析である。著者が指摘するように、経済的に豊かな国ほど民主主義的である可能性が高く、反対に貧しい国ほど権威主義的である可能性が高いというように政治体制と経済状況に関連はあるものの、なぜ経済状況が政治体制に影響するのか（または反対に、なぜ政治体制が経済状況に影響するのか）いった因果的関連については議論が続いている。民主主義や権威主義といった体制と経済状況との因果的関連の分析が進めば、現在の世界情勢や政治に対する理解につながるだけでなく、今後の予測を行うことにも有用になると思う。（中川　敬士）